

布施の心

10

本多 克也

(昭和も)

文・徳永 耕一

【開発】

私が船屋に入社したのは一九六〇年だった。

この頃の日本は、高度経済成長期に入り、活気に満ちていた。一方で日米安保条約改定の年にあたり、各地で学生運動が燃え盛り、世上は騒然としていた。社会党の浅沼委員長が右翼の暴漢に刺殺されたのもこの年だ。

しかし、私にはどれも無縁のことだった。やつと得られた仕事に一日も早く慣れて、戦力として認められることだけが私の頭を占めていた。

その頃岡野さんたちが取り組んでいたのは、自動車関連の新製品の開発だった。

この頃日本は、自動車産業の黎明期で、質量ともに飛躍的な伸びを見せていた。

入社してしばらく経つたある日、出社すると岡野さんが、「本多、車のテールランプの塗装を研究しろ」と、いきなり私に課題を言ってきた。

自動車の後部にはテールランプがあるが、それが金属のようだと高級感が出るし、反対にプラスチックのままだと、安っぽく見える。

その当時はまだ、テールランプはプラスチックのままだった。

私は、突然もあり、面食らって言葉を返した。

「プラスチックに金属メッキは無理ではないですか？」

「それをやれ！誰にでもできるものはいらない」

「ひとりででしようか？」

「当たり前だろう」

「何から手をつければよいでしょうか？」



2023年3月本多産業株式会社は
設立50周年を迎えます。

 **本多産業株式会社**

【本 社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814
TEL:045-869-1133
【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677
TEL:0957-38-3520

「先ずベースを作れ」

しばらく、二人の緊張したやり取りが続いた。

常識的には、プラスチックに金属メッキをすることは、プラスチックに導電性がないので無理だ。（導電性・電気を通す性質）それを、岡野さんはできるようにしようと。戸惑っている私に岡野さんはだめ押しした。

「図書館でも本屋でも行って、自分で勉強しろ」

岡野さんは、仕事には厳しく、妥協を許さない人だった。言葉も、歯に衣を着せなかつた。しかし、言っていることは筋が通っているし、内容は相手のためになる温かさを含んでいた。

岡野さんは、敢えて突き放したような言い方をしながら、実は私の自発心を引き出そうとしたのだ。私は入社してまもなく岡野さんのそんな人柄を感じ取っていたので、今回のぶつきら棒な指示を、「岡野さんが私にミッションを与えてくれた」と受け取り、嬉しくなつて、真剣に課題に取り組もうとした。

岡野さんとしても多分、私がひとつことを決めたらそれを諦めないという性格だというと見抜いて、敢えてハーダルの高い課題を私に与えたのかも知れない。

このミッションを通じて、「研究とは何ぞや」ということを見抜かれた。そして、結果的にはこのミッションが私の「人生の転機」になつた。

その後、必死に自分でもあれこれ考えたり、岡野さんや周囲にもアドバイスをもらしながら、研究を続けた。もちろん、研究だけでは飯は食えないでの、通常の仕事と掛け持ちだった。そのため、勤務時間は8時間をはるかに超えて、毎日残業の連続だった。